

小学校における慢性長期欠席：簡単で可能のある解決法

子供が何日学校を休んだかを両親に思い出させることと、そして定期的に登校することの重要性は、小学校での長期欠席を抑制するのに役立つ簡単で低コストの方法かもしれない、と研究は示唆しています。

デニス・マリー オードウェイ 著 | 2019年1月4日

本著を再出版する

子供が何日学校を休んだかを両親に思い出させることと、そして定期的に登校することの重要性は、小学校での長期欠席を抑制するのに役立つ簡単で低コストの方法かもしれない、と[新しい研究](#)は示唆しています。

上記の2つの点を強調する個人名の記された手紙を家族に送ることが、彼らが調査したカリフォルニア州における10の地方、郊外、都市部の学区で慢性的な長期欠席を14.9%減少させたことを、研究者達は見出していました。2018年12月に *American Educational Research Journal* に発表されたこの研究は「K-5年生の児童の出席を大規模に改善する方法に関する実験的証拠を提示し、教育へ親の関与を高めることを意味する」と、著者らは主張しています。

2018年の初めに発表された[同様の、しかしより大規模な研究](#)によりますと、子供たちが欠席していた日数を伝え、出席を改善するための助けを求める手紙を、フィラデルフィアの家族が受け取った後、児童の出席が改善されたことがわかりました。幼稚園から第12学年までのリスクの高い児童を対象にしたこの研究では、両親が郵便物を受け取った児童の間では慢性的な長期欠席が少なくとも10%減少したことがわかりました。

米国教育省(DOE)によると、2013-14年には全国で[600万人以上の児童](#)—約7人に1人—が慢性的に欠席し、15日以上学校を欠席したことを意味します。フィラデルフィアとカリフォルニアで長期欠席を研究した研究者は、慢性的な長期欠席を18日以上欠席することと定義しています。

教育のリーダーは何年もの間、特にクラスで追加の支援を必要としている者の多い低所得の児童の間で、出席を改善する方法を見つけようと努力してきました。DOEは、慢性的な長期欠席を「[隠れた教育危機](#)」と呼んでいます。

以前の調査は、全ての子供たちにとって規則的に出席することの重要性を示しています。出席率の高い生徒は、[テストの点数が高くなる傾向](#)があり、[留年する可能性は低くなります](#)。

この新しい研究の共著者であり、フィラデルフィアの長期欠席に焦点を当てた研究を主導した[トッド・ロジャーズ氏](#)は、このような郵送は、多くのお金を費やすことなく、親に連絡し、変化を促す簡単な方法であるように思われると述べていました。年に数回家族に送られる郵送の総費用は、フィラデルフィアでは世帯あたり年間6.60ドル、カリフォルニアでは児童1人あたり年間約5.68ドルでした。

ロジャーズ氏によると、介入は規模を拡大することも簡単で、長期欠席を減らすための他の一般的な方法—例えば、生徒をメンターやソーシャルワーカーに割り当てる—よりも大幅に安価です。

ハーバード大学ケネディ・スクールの公共政策の教授である行動科学者のロジャーズ氏は、彼と他の研究者が他の学区で郵送を実験し、長期欠席の同様の減少を見たと述べていました。例えば、シカゴでは、慢性的な長期欠席が[11%減少](#)したことを研究者たちは見出しました。ロジャーズ氏は [In Class Today \[今教室では\]](#) という組織を共同設立し、現在30の学区と協力して、出席率を高めることを目的に対象者の要望に沿った郵送に取り組んでいます。

「私たちが見つけたことの1つは、郵便物が驚くほど効果的であるということです」と彼は言い、郵便物は家族内での会話の出発点になると付け加えました。「大多数の家族は、郵便物を子供たちに見せて冷蔵庫に貼り、カウンターの上に置くと報告しています。」

しかし、郵送は他の介入に取って代わることを意図したものではありません。代わりに、彼らは学区が児童の長期欠席の背後にある「より困難で構造的な理由を追いかける」ことを可能にするために援助資源を利用できるようにする助けとなる、とロジャーズは言いました。「それは多くの効果的な介入の組み合わせになるでしょう」と彼は話していました。

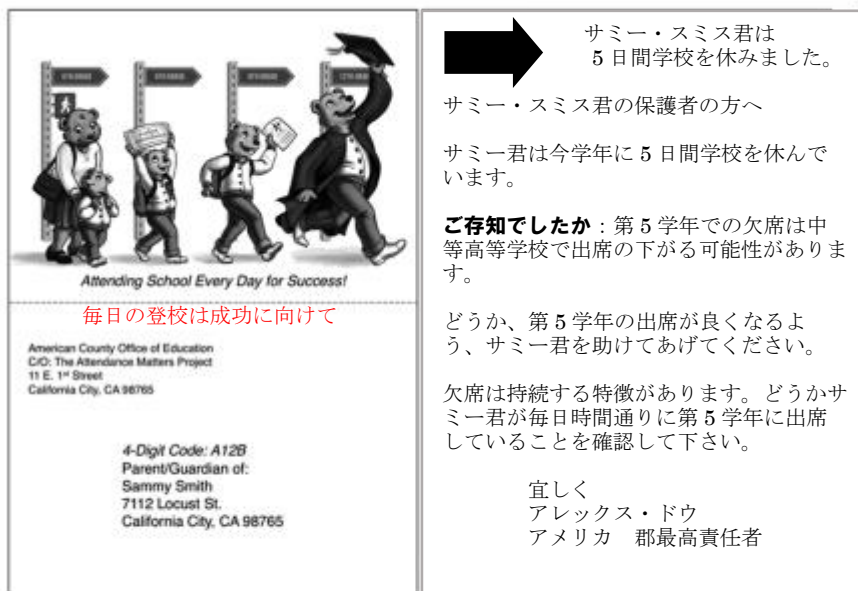


図 1. 第 5 学年出席郵便 (外面と内面) の例

「親の信念をターゲットにすることで低学年の児童の長期欠席を減らす」と題された新しい研究は、特に低学年に焦点を当てており、著者らは、高等学校を含むその後の学年の出席に影響を与える可能性があると説明しています。児童の出席に影響する要因の多くを、親が制御しやすいため、著者らはまた、低学年に焦点を当てることを選択しました。

「特に低学年では、親は... 学校への往復の交通手段、セントラルオフィスとのコミュニケーション、休暇の計画に影響力を持っている」と、ハーバード大学とスタンフォード大学、ボストン大学の研究者チームである著者達は書いています。

著者らは、就学に関する親の誤った信念を修正することにより、生徒の出席率を高める低コストの介入を開発することを目指しました。一部の親は、小学校への出席を高校への出席ほど重要だと考えていない、と研究者たちは書いています。一方、一部の親は、子供達が学校を休んだ日数を過小評価しています。

研究者らは、幼稚園児の家族と、前年度に欠席率が最も高かった第 1-5 年の児童を対象にしました。

一部の家族はダイレクトメールを受け取るように無作為に割り当てられましたが、他の家族はダイレクトメールと、子供が学校に通う助けになるようソーシャルネットワークを利用することを親に奨励する補足的な挿入文書を受け取るようにランダムに選択されました。対照群に割り当てられた家族はいずれも受け取っていませんでした。合計 10,967 のカリフォルニア世帯がサンプルを構成しました。

印刷物を受け取るように選ばれた親は、学年度中に平均 5 回それらを手に入れました。スペイン語を話す世帯はスペイン語の資料を受け取りました。

年末に、研究者達は 15 分間の電話調査を実施して、郵送が両親の信念に影響を与えたかどうかを測定しようとしました。

研究者が学んだことは次のとおりです。

- 10 の学区全体で、小学生は学年度中に平均 6.6 日欠席しました。幼稚園児は最も多くの幼稚園を欠席する傾向があり、平均して 7.3 日でした。第 3 年生と第 5 年生の子供は、最も少ない日数 (平均 5.9 日) を休んでいました。
- 慢性的な長期欠席は、家族がダイレクトメールまたは補足的な挿入文書付きのダイレクトメールを受け取った児童で 14.9% 低下していました。
- 家族が印刷物を受け取った児童は平均 6.37 日欠席し、家族が対照群であった児童は平均 6.9 日欠席していました。補足挿入文書自体は、出席に大きな影響を与えたようには見えませんでした。
- 「現在の介入により、児童は年間を通じてさらに 3,486 日以上学校に通うことができました... そして、最もリスクの高い児童にとってより効果的であるように見えました。英語が第二言語であり、社会経済的に不利な立場にある家庭の児童の方で、介入効果は大きくなっていました」
- 電話調査で、子どもが欠席した授業日数を尋ねたところ、印刷物を受け取った保護者の方がより正確に回答しました。これらの両親は平均して 3.8 日ずれていました。郵便物を受け取らなかった親は 5.1 日ずれていました。
- 郵送物を受け取った親は、若い児童に対する学校教育の価値と規則的な登校の重要性に関する陳述に同意する可能性が高くなっていました。

小学校に関するさらなる研究をお探しですか?[学校給食](#)、[制服](#)、[学校菜園](#)に関する記事をご覧ください。また、[同じ人種の教師がいること](#)の利点に関する調査もまとめました。

ジャーナリストのリソースは、カリフォルニアの家族に送られた郵便物の例の画像を使用する許可を得ました。この画像は、2018年12月に発表された研究からコピーされています。

著者について



[デニス-マリー・オードウェイ](#)

彼女は、オーランド・センチネルやフィラデルフィア・インクワイアラーなど、米国と中央アメリカの新聞やラジオ局の記者として働いた後、2015年にジャーナリストのリソースに参加しました。彼女の作品は、*USA TODAY*、*ニューヨーク・タイムズ*、*シカゴ・トリビューン*、*ワシントン・ポスト*などの出版物にも掲載されています。彼女は多数の国、地域、州レベルのジャーナリズム賞を受賞しており、フロリダ A&M 大学でのいじめやその他の問題に焦点を当てた調査シリーズで 2013 年にピューリッツァー賞のファイナリストに選ばれました。オードウェイは、ハーバード大学のニーマンジャーナリズム財団の 2014-15 フェローでした。彼女はまた、教育作家協会の理事も務めています。@DeniseOrdway

ORIGINAL PAPER

Chronic absenteeism in elementary schools: An easy potential solution

Reminding parents how many days of school their kids have missed and the importance of regular attendance may be a simple, low-cost way to help curb absenteeism in elementary schools, a study suggests.

by [Denise-Marie Ordway](#) | January 4, 2019

(Pixabay/NeiFo)

FacebookTwitterLinkedInRedditEmail

Republish This Article

Reminding parents how many days of school their kids have missed and the importance of regular attendance may be a simple, low-cost way to help curb absenteeism in elementary schools, [a new study](#) suggests.

Researchers found that sending families personalized letters stressing these two points resulted in a 14.9 percent reduction in chronic absenteeism in the 10 rural, suburban and urban school districts in California they studied. The authors claim the study, published in December 2018 in the *American Educational Research Journal*, presents “experimental evidence on how to improve student attendance in grades K-5 at scale and has implications for increasing parental involvement in education.”

[A similar but larger study](#) published earlier in 2018 also found that student attendance improved after families in Philadelphia received letters telling them how many days their children had been absent and asking for help improving their attendance. That study, which targeted high-risk students in kindergarten through 12th grade, found that chronic absenteeism fell by at least 10 percent among students whose parents received the mailings.

Nationwide, more than [6 million students](#) — about 1 in 7 — were chronically absent in 2013-14, meaning

they missed 15 or more days of school, according to the U.S. Department of Education (DOE). The researchers who studied absenteeism in Philadelphia and California define chronic absenteeism as missing 18 or more days of school.

Education leaders have been trying for years to find ways to improve attendance, especially among low-income students, many of whom need extra help in class. The DOE has called chronic absenteeism “[a hidden education crisis.](#)”

Prior research indicates the importance of regular attendance for all kids. Students with better attendance rates [tend to earn higher test scores](#) and are [less likely to be held back](#) a grade.

[Todd Rogers](#), a co-author of this new study who also led the study focusing on absenteeism in Philadelphia, said these mailings seem to be an easy way to reach parents and encourage change without spending a lot of money. The total cost of the mailings, sent to families several times a year, was \$6.60 per household per year in Philadelphia and about \$5.68 per student per year in California.

The intervention also is easy to scale, Rogers said, and is substantially cheaper than other common methods for reducing absenteeism — assigning students to mentors or social workers, for example.

Rogers, a behavioral scientist who is a professor of public policy at Harvard Kennedy School of Government, said he and other researchers have experimented with the mailings in other school districts and seen similar reductions in absenteeism. In Chicago, for instance, researchers found [an 11 percent reduction](#) in chronic absenteeism. Rogers co-founded an organization called [In Class Today](#), which currently is working with 30 school districts on tailored mailings aimed at boosting attendance.

“One thing we found is that mail is amazingly effective,” he said, adding that the mailings become a springboard for conversation within families. “The majority of families report showing these to kids and putting these on the fridge and putting these on the counter.”

But the mailings are not meant to replace other interventions. Instead, they help free up resources to allow school districts to “go after the harder, structural reasons” behind student absenteeism, Rogers said.

“It’s going to be a combination of lots of effective interventions,” he said.

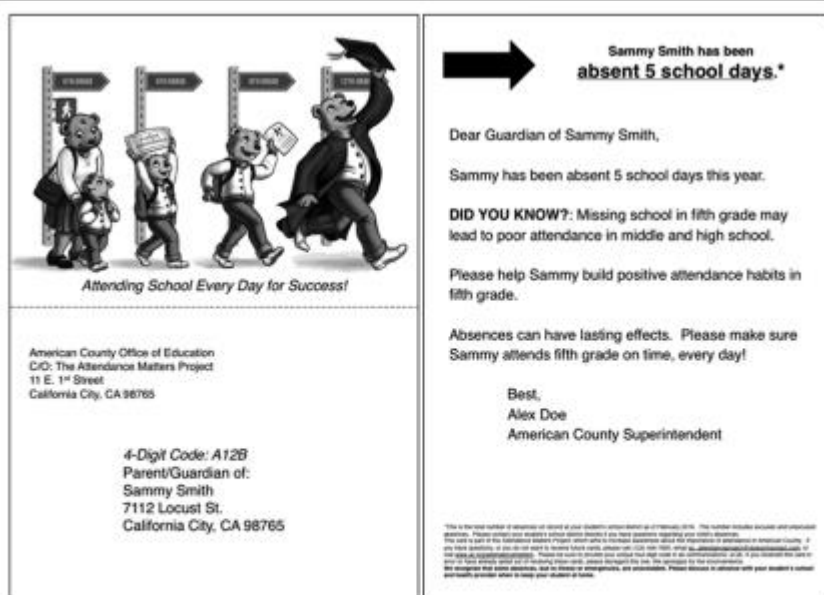


Figure 1. Example of the K-5 Attendance Mailing (Exterior and Interior).

The new study, titled [“Reducing Student Absenteeism in the Early Grades by Targeting Parental](#)

[Beliefs,](#)” focuses specifically on the early grades, which, the authors explain, could influence attendance in later grades, including high school. The authors also chose to focus on the early grades because parents have more control over many of the factors that affect young children’s attendance.

“Particularly in early grades, parents have influence over ... transportation to and from school, communication with the central office, and planning vacations,” write the authors, a team of researchers from Harvard and Stanford universities and Boston College.

The authors aimed to develop a low-cost intervention that would boost student attendance by correcting parents’ mistaken beliefs about school attendance. Some parents do not consider elementary school attendance as important as high school attendance, the researchers write. Meanwhile, some parents underestimate the number of days their kids have missed.

The researchers targeted the families of students in kindergarten as well as students in grades 1-5 who had the highest absentee rates during the previous academic year.

Some families were randomly assigned to receive the mailer while others were randomly selected to receive the mailer plus a supplementary insert that encouraged parents to rely on their social networks for help getting their kids to and from school. Families assigned to the control group did not receive either. A total of 10,967 California households comprised the sample.

Parents chosen to receive any printed materials got them an average of five times during the school year. Spanish-speaking households received materials in Spanish.

At the end of the year, researchers conducted 15-minute phone surveys to try to gauge whether the mailings affected parents’ beliefs.

Here’s what researchers learned:

- Across the 10 school districts, elementary school students missed an average of 6.6 days during the school year. Kindergarteners tended to miss the most school — 7.3 days, on average. Children in grades 3 and 5 missed the fewest days — 5.9 days, on average.
- Chronic absenteeism was 14.9 percent lower among students whose families received the mailer or the mailer with the supplementary insert.
- Students whose families received the printed materials were absent an average of 6.37 days while students whose families were in the control group were absent an average of 6.9 days. It does not appear that the supplemental insert, on its own, had much of an effect on attendance.
- “The present intervention resulted in students attending 3,486 more days of school over the course of the year ... and appeared to be more effective for the most at-risk students. The treatment effect was larger for students for whom English is a second language and who come from households that are socioeconomically disadvantaged.”
- When asked during the phone survey about the number of school days their children had missed, parents who received the printed materials responded more accurately. These parents were off by 3.8 days, on average. Parents who did not receive any mailings were off by 5.1 days.
- Parents who received the mailings were more likely to agree with statements about the value of schooling for young children and the importance of regular school attendance.

Looking for more research on elementary schools? Check out our write-ups on [school lunches](#), [school uniforms](#) and [school vegetable gardens](#). We’ve also compiled research on the benefits of students [having](#)

[teachers of the same race.](#)

Journalist's Resource received permission to use an image of the example of the mailing sent to California families. This image was copied from the December 2018 published study.

About The Author



[Denise-Marie Ordway](#)

She joined *The Journalist's Resource* in 2015 after working as a reporter for newspapers and radio stations in the U.S. and Central America, including the *Orlando Sentinel* and *Philadelphia Inquirer*. Her work also has appeared in publications such as *USA TODAY*, the *New York Times*, *Chicago Tribune* and *Washington Post*. She has received a multitude of national, regional and state-level journalism awards and was named as a Pulitzer Prize finalist in 2013 for an investigative series she led that focused on hazing and other problems at Florida A&M University. Ordway was a 2014-15 Fellow of Harvard's Nieman Foundation for Journalism. She also serves on the board of directors of the Education Writers Association. [@DeniseOrdway](#)